

藤田由美子先生

橘 左京 作

私が学んだ小学校の木造校舎は四十年ほど前に取り壊されて今はない。跡地には校舎があったことを銘記した石碑が建っている。今年のお盆は数年ぶりに実家に帰って過ごした。今は物置部屋になっっている私の勉強部屋にある本棚を整理していたら、小学校の卒業アルバムが出てきた。アルバムを開くと両側に松の木が配置された校舎正面玄関をバックに、校長先生、教頭先生、担任の藤田由美子先生を囲むようにして卒業生が並んでいる。その中に白い包帯を頭に巻いて立っている私の姿がある。卒業アルバムには授業風景、修学旅行、運動会、写生大会、文化祭など主に高学年の時に撮った写真が載っている。藤田先生は私が五、六年生の時にクラスを担当した先生だ。

私たち悪ガキ五人と藤田先生との間には卒業アルバムには載っていない思い出が脳裏に刻まれている。秋の写生大会で校外に出掛けた時の出来事だ。私たち悪ガキグループは写生の方はそっちのけにして、近くの畑に入って梨や柿を盗んで食べたことがあった。農家の人に見つかって、私たちはその場を逃れたが、藤田先生は農家の人に何度も何度も頭を下げて謝っていた姿を覚えている。

六年生の時、学校のグラウンドで隣のクラスの悪ガキグループと喧嘩した時の出来事だ。突き飛ばされた私はコンクリート製の塀に頭をぶつけて七針も縫う大怪我をした。この時も藤田先生が校長先生に何度も何度も謝っていた姿を覚えている。突然襲った地震で校舎が大きく揺れ恐怖にかられた私たちを安全な場所に避難、誘導してくれた藤田先生。大雪の時、集団下校に付き添って家の近くまで送ってくれた藤田先生。

藤田先生との思い出が一杯詰まった学び舎を卒業する日の朝、私たちは先生に尋ねた。

「先生、中学生になっても遊びに来てもいいですか？」

先生はにっこり笑って、「いいわよ」と答えた。

授業が早めに終わったある日の放課後、私たちは藤田先生に会い

に行くことにした。自転車を漕いで小学校に行ったら、藤田先生は隣の小学校に転勤したことを教頭先生から知らされた。

隣町には藤田先生の家もあるが、自転車で行くには遠すぎる。先生の家が駅の近くにあることを知っていたので、休日に列車に乗って先生の家に行くことにした。駅前の交番で先生の家を教えてもらい、先生の家に向かった。藤田先生は玄関先に出て私たち五人を迎えてくれた。先生の家でお菓子を食べながら、思い出話に花を咲かせた。

藤田先生は私たちの卒業式の数日前に校長先生から転勤の内示をもらっていたが、子供たちには絶対には言わないようと口止めをされていたという。その後も何度か私たちは先生の家に遊びに行った。高校に進学してからは、私たち五人はそれぞれの進路に向かって歩み始め、互いに疎遠になっていた。

それでも私と藤田先生との年賀状のやり取りは続いていた。社会人になつてしばらく経つたある日、家業を継いで地元に残っている一人から同級会の案内が届いた。就職や結婚で実家を離れた同級生が帰省しやすいお盆に同級会を行うという内容だった。当時の私は毎年、お盆と正月には実家に帰省していた。藤田先生とほぼ全員の同級生とが出席するなかで、初めての同級会が行われた。お酒が入って顔を赤らめた先生が「先生はね、優秀でまじめな子供よりも、あなたたちのような素行の悪かった問題児はいつまでも覚えているのよ」と言われ照れ臭かった。

藤田先生は四年ごとに開く同級会には必ず出席してくれた。次の同級会開催の前年、十一月に一通の年賀欠札が届いた。葉書には藤田先生が病気で亡くなったことが書かれていた。翌年の同級会には藤田先生の姿はなかったが、悪ガキの一人が持って来た卒業アルバムには藤田先生の元気な姿があった。(了)